

3月幾代会例会
青梅「梅の公園」梅見と幾代会総会

1. 日時: 2025年3月 2 日(日)
 2. 集合時間と場所: 「梅の公園」正面口、集合時間: 10:30
 - 3・梅の公園散策参加者: 櫻井、土方、深川、岡(記)
「梅の公園」中央口10:30 - 園内散策 - 12:30(昼食) - 総会
 - 4・総会: 越前会長宅 13:00~15:30 太田、中部、宮野、越前が合流(計 8 名)
-

「梅の公園」散策報告

天気は穏やかで梅見日よりであったが、例年よりも梅の開花が遅く開花状況は3分咲き、「探梅」をじっくり楽しんだ。この時期の梅花は、一輪づつを丹念に観察するのに適している。この公園には、万葉の時代から平安の文化にちなんだ梅の名も散見され、今回は「文化・文学」の吟味・鑑賞とすることにした。

1. 梅の鑑賞

梅の開花時期は1月下旬~3月末と長く、初期早咲きの梅一輪を探す(探梅)、中期咲き誇る梅花の鑑賞と香りを求める(賞梅)、晩期遅咲きの梅を名残り惜しみながら鑑賞する(送梅)とあるが、本日は「探梅」に相当する時期であった。

2. 観梅の「つぼ」: 以下、3点の梅鑑賞のポイントを確認しながら散策した。

「咲き始めに見頃あり」: 初期の梅花は完全花が多く、端正で美しい。一輪づつを鑑賞できた。

「老成の美」: 若木が多いので、伝統的な日本庭園や梅園の枝が「横斜」して樹肌が「鉄幹」様に黒光りする老木は見当たらないが樹形の良いものもある。

「歩いて愛でる色・模様」: 開花が少なかったが梅の花の特徴がみられた。



●緋梅系八重の「楠玉」

蕾ははじけるような「裏紅」の紅色が鮮やかなことから名前と思われる。

表の花色は「淡紅色」であり、裏紅との対比が美しい。

「裏紅」で美しい梅には、「鴛鴦」「蓮久」などがあるが未開花であった。



●野梅系一重の「道知辺」

紅色をして端正だが、枝の皮を少し剥いてみると「白色」であり、緋梅系ではなく野梅系である。早咲きの大輪であり、道知辺の役割りからの名と思われる。

この花には、雄蕊が花弁様に変化した「旗弁」がみられた。



●緋梅系一重の「大盃枝垂」

早咲きの紅色と一重の端正な花、

1月下旬の紅色の梅であり、野梅系の白い「冬至」「八重野梅」と同時期に咲く。



●緋梅系一重の「紅千鳥」

一重の「本紅」であり、「旗弁」が多くでるので、これが千鳥が飛んでいる様に見えることからの名と思われる。

この花には花弁が6枚の「六弁花」もみられた。六弁花は「月の桂」でもみられる。



●野梅系一重の「鶯宿」

「淡紅色」の端正な花である。「鶯宿」は実梅であり、実は梅酒などに使われる。

花梅として「鶯宿梅」があるので紛らわしい。

「鶯宿梅」は、平安時代の村上天皇の御代(947—956)、御所清涼殿の梅が枯れ、代わりの梅をお探しになり、勅命を受けて姿かたちの立派な梅を掘り取った。それには歌が結びつけてあり、帝は「それは何か」とおっしゃって御覧になると、「**勅なればいとも**

かしこしうぐいすの宿はと問はばいかが答へむ」とあり、帝は、「何者か」と人をやってお調べになったところ、紀貫之殿の御娘の住む家だった。梅の木は返したとのこと。

●緋梅系八重の「五節の舞」

五節舞とは、その年の収穫を神様に感謝する新嘗祭(にいなめさい)のクライマックスである豊明節会(とよあかりのせちえ)で、神前に披露されるものです。天皇陛下のご即位を神前に奉告する大嘗祭(だいじょうさい)においても披露され、令和の今上陛下も御覧になっています。**舞の中で舞姫が五回袖をひるがえす**ことからの名。五節舞を披露する舞姫は通常4人(大嘗祭の時は5人)。その顔ぶれは公卿(上級貴族)の娘が2〜3人、国司(中級貴族)の娘が1〜2人選抜さる。五節舞はぶっつけ本番ではなく、本番に向けて、帳台試(ちょうだいのこころみ)・御前試(ごぜんのこころみ)というリハーサルが行われた。このリハーサルを、内裏の女房たちが見ることは堅く禁じられていたが、蔵人(くろうど。天皇陛下の側近)の制止もはねのけて、女房たちが、常寧殿(じょうねいでん)までリハーサルを見にいく様子が**清少納言『枕草子』**には書かれている。

●緋梅系八重の「幾代寝覚」(未開花)

小倉百人一首に収録されている源兼昌の歌

「淡路島通ふ千鳥の鳴く声に いく夜寝覚めぬ須磨の関守」

淡路島から飛び通う千鳥の鳴く声に、いったいいく夜を覚ましたことだろう、須磨の関守は。

●野梅系一重の「酈懸梅」(てっけんばい)「茶筌梅」(未開花)

一重咲きの小輪種で、花径は1.5〜2cm程度で花色は白色であるが、花弁が殆ど退化して蕊だけが目立つ。

花弁の小さい姿が、菊のように見えるが『菊梅』という梅の品種名はあったため酈懸にした。

開花期は2月上旬から3月中旬頃となる。古い時代に中国から渡来したと言われている。

能の演目、「枕慈童(まくらじどう)」に出てくる「菊が咲き乱れる酈懸(てっけん)山」に由来する。

3. 万葉集の文化

和暦「令和」を提唱された万葉集研究第一人者、「令和」考案の「中西進」氏が梅の公園を訪れた記念プレートがある。中西進氏は、「**元号は年を数えるカレンダーではなく文化である、国の文化目標としてのビジョンである**」と、文化を強調されている。「**令和**」元号の元となった万葉集「大伴旅人」の大宰府での梅見の宴の序文:「初春の**令**月にして気淑(よ)く風**和**(やわら)ぎ、梅は鏡前の粉を披(ひら)き、蘭はい後の香を薫(かお)らす」:新春の好き月、空気は美しく風はさわやかに、梅は女性が鏡の前で装う白粉のごとく白く咲き、蘭は身を飾った香の如きかおりを漂わせている。

「万葉の言葉」をつけ、万葉の香りをを感じる名が、「梅の公園」の梅樹につけられている。

●三諸(みもろ)

三諸者(は)人守山本邊者(は)馬酔木花開末邊方(は)椿花開浦妙山曾(ぞ)泣児守山
三諸は人の守る山 本辺は馬酔木咲き 末辺は椿咲く うらぐわし山ぞ 泣く子守る山

●初花(はつはな)

初花之(の)可散物乎(を)人事乃(の)繁因而(て)止息比者鴨(かも)
初花の 散るべきものを 人言の 繁きによりて 澱む頃かも

●久方(ひさかた)

久方之(の)天芳山此夕霞たなびく春立下(しも)
久方の天香具山 このタベ 霞たなびく 春立つらしも

●万代(よろずよ)

萬代の得之(とし)波(は)岐布得母(も)烏梅能(の)波奈(はな)多由流己等奈久佐吉和多留倍子(べし)
万代の年は来経るとも 梅の花絶ゆることなく 咲きわたるべし

●諸人(もろびと)

烏梅能波奈多乎(お)弓加射世留母呂比得波(は)家布能(の)阿比太波(は)多努斯久(く)阿流倍斯(べし)
梅の花 折りてかざせる諸人は 今日の間は 楽しくあるべし

●百鳥(ももとり)

烏梅能(の)波奈(はな)伊麻佐加利奈利(なり)毛々等利能(の)己恵能(の)古保志き波流岐多流良斯(らし)
梅の花 今盛りなり 百鳥の 声の恋しき 春来るらし

「忍」昭和20年夏 八月中浣 吉川英治

吉川英治の書「忍」にも「百鳥」が出てきます。吉川英治は終戦の玉音放送を聞き、筆を折る決心をしました。そのとき、「忍」という文章を残しています。

「うれしからずや忍ぶ日も たのしからずや苛(か)き世も 心 太古の民となり 謙虚創始の祖となりて
ふたたび生まむ建国の 大きな希望を家ごとに 慙愧日々省みて 臥薪きの心をわするなく
春あれば夏 秋あれば冬 四季の輪廻をながめつつ 千代八千代日出る国に 百鳥(ももとり)うたひ
散るなき華のにほひ盈(みち)つまで」

4. 梅の公園の句碑

梅の公園の日本庭園にある、梅に因んだ句を集めた、柚木の俳句の会の「句碑」を鑑賞した。

皆さんで読み比べたが、変体仮名を含む草書体の句は、読解が非常に難しい。俳句の会の市川さんに一部の読みかたを越前さん経由でご教示ねがった。まだ読み方に未完があるが以下に示す。

「梅の公園の句碑」



明治まで祖父水車守梅の谿(たに)
祝われる華登(と)なり希(け)り梅能(の)主
梅ばかり葉奈(はな)ば可(か)り能(の)小村可奈(かな)
梅咲くや茶席にひらく長屋門
来馴(な)れても見なれても亦(また)梅に来る
舞う獅子能(の)角つきあげる梅の空
獅子舞の笛も太鼓も梅の中

向う足に閑(ひま)をあづけて梅探る
梅過ぎて静けさも登(ど)る草思堂
走らでや青梅マラソン梅二月
葉は去年実みのりしをくふ梅見茶屋
愛宕嶺能(の)懐ぬらし梅の花
草思堂訪るべし梅を見がてらに
梅林能(の)中に茶屋あり農家阿利(あり)
薪棚のみなよく積まれ梅能(の)村
梅ぽつぽつ絹よりほそき雨がふる
生涯能(の)杖爾(に)す可(が)りて梅を生具(く)
せせらぎに梅一輪の影お登須(とす)
梅花村果て奈(な)る家に稀の客
みつ峰のいま蜜源能(の)梅咲けり
梅暮れる余韻みじ可(か)き宮能(の)鈴
美しく梅の織りなす郷土の香
川鳥志(し)きりに鳴き梅咲けり
手作りの蒟蒻うまし梅祭
夕づきと親木の梅能(の)匂い来し
紅梅に入日は奈(な)やぎ移りけり
愛宕嶺を背に岩割能(の)梅咲希里(けり)
梅咲いてこの旧道を好みゆく
月出でて梅林靄に沈みけり
梅一輪山の屏風を得てはやし
梅に舞う跳ね足軽きささら獅子
聖佛能(の)頬ゆたかなり梅爾(に)爾(に)む
老梅の真下爾(に)ありて酒少し
口笛になきやむ犬や夜能(の)梅

めばしい梅樹が未開花であったが、梅に因んだ文化の香りを中心に散策した。

以上 記(岡 孝夫)